

野々市市上林の農業法人「ぶった農産」が、種まきと肥料のやり方を工夫し、米作りの省力化に挑戦している。今年は作業時間を減らす一方、収量を増やすことに成功した。重労働とされてきた農業だが、佛田利弘社長(60)は「体力に自信がなくても続けられる農業を目指している。担い手を増やすために働き方を変えたい」と意気込む。(都沙羅)



稲作省力化で 働き方改革を

「密苗」とペースト肥料活用

ぶった農産は、苗箱にまく種の量を増やして手間を省く「密苗」技術と、粘り気のある液状の「ペースト肥料」を活用した。

密苗は、二〇一六年にぶった農産のアイデアを基に、県農業試験場と農業資材販売のヤンマーアグリジャパン(大阪市)が開発した技術。通常は一つの苗箱に百〜百五十粒の種をまくが、密苗は二百五十一〜三百粒に増やす。一七年ごろから普及し、一九年には全国五万粒の水田で導入された。

ぶった農産は三年ほど前から、密苗で田植えを省力化してきた。ただ、夏に水田で二回する追肥の作業効率は手つかずのまま。炎天下で約二十キの肥料袋を運び、散布機を背負って田

んぼを歩く重労働が必要だった。

肥料のやり方を改善するために着目したのがペースト肥料。根に触れた直後から吸収されるため、一般的な粒状の肥料より生育効率が良いとされる。一九七九(昭和五十四)年に肥料メーカの片倉コープアグリ(東京都)が開発した。

ぶった農産は同社に密苗と組み合わせた栽培を提案。今春、両者は野々市市内のコシヒカリ栽培田約十畝で試した。

略。施肥は田植え時の一回で済んだ。

作業時間を調べたところ、粒状肥料を使っていた前年と比べて9%減った。

一方で、日照時間や気温など気象の変化に合わせた肥料の分量調節が課題だという。ペースト肥料を使うには専用の田植え機も必要に

なる。

ぶった農産は来年、所有する水田全域の約二十畝で同様の栽培法を試す。佛田社長は「一人の力でも米作りができる農業を実現したい」と話している。



5月、専用の田植え機にペースト肥料をタンクからホースで注入するぶった農産関係者ら。野々市市上林で(片倉コープアグリ提供)

野々市市・ぶった農産が成果